

手記

栃木県 飯島 幸 作

(旧姓 関口)

昭和十八(一九四三)年三月志願。十八歳で横須賀海兵隊に入隊、五月、九州築城海軍航空隊。

昭和十九年三月、千葉航空隊に三日間など。

南方に行きたかったが北方行きになつたので泣いた。北海道千歳航空隊であった。五月ごろ、上官から「貴様たちは二度と帰つてこれられないから、身の回りの物を故郷に送れ」と言われたので、身の回りの物と写真を三枚、母に送つた。それは今も大事に持っている。

十九年十月まで占守島第五百五十三航空隊に行つた。

二十年八月、終戦の無電と天皇陛下の詔勅が

あつた。神国日本が負けるとは思わなかつた。

二十年十月、約百五十人ぐらい、ソ連の船に乗せられたので、日本に帰れるのかと胸中不安でいっぱいであつた。オホーツク海から裏日本に行くのかと思つていたらソ連のナホトカに着いた。本当に寒いと思つた。

一日じゆう歩いて着いたところはソ連の収容所であつた。話によると、前にドイツの軍人が収容されていたそうで、丸太を積んだ隙間だらけの家であつた。三日目から伐採の作業が始まつた。鋸で一メートル五十センチぐらいの長さに二人で引いた。十日間に一日、休みのときもあつた。零下四〇度にもなると作業中止のときもあつた。

食事は一食、黒パン三〇〇グラム。時には朝食と昼食を一度に食べたこともある。それで栄養失調になつた人もいる。毎日伐採で、全く悲惨な作業である。だが、本当に辛いのは寒さより食事である。

そのうちロシアの言葉を覚えて、腕時計や万年

筆を黒パン一キログラムと交換して食べたこともあった。万年筆はインクがないので使用できない。腕時計は竜頭を巻くのを知らないで三日もたつと故障したと持つてくるので、巻き方を教えると言っていた。

年数がたつにつれ、飢えと寒さで戦友が一人、二人と死んでいった。今度は自分かなとも考え、南方へ行けばよかったなあと考えた。一年くらいたった頃でしょうか、どうせ死ぬなら何でも腹いっぱい食べて収容所から逃げよう、どこまで逃げようかと戦友四、五人と話し合っていた。そのうち日本語で書いた書類が回ってきたのでみんな読んで読んだ。すると、第〇〇収容所で何人か逃げ出して銃殺されたと細かく書いてあった。半信半疑であったが、諦めて、自分たちは生きられるだけ生きようということになった。

八月ごろになると草の新芽を摘んで食べた。中には毒草もあって、間違つてそれを食べ命を落とした戦友たちもいた。それから収容所の前に毒草

の見本が並べられた。また、白樺の枯れた木を割ると中に虫がいた。おいしいので、皆とともに腹いっぱい食べたこともあった。

伐採作業はどこまでも続いている。伐採中、倒れてくる大きな木の下敷きになって命を落とした戦友もいた。全く悲惨この上もないことであった。

寒さと重労働と栄養失調が原因で多数の戦友を亡くした。心から冥福を祈る。

昭和二十二年五月、舞鶴港着。復員。

【執筆者の紹介】

引揚時の本籍 栃木県下都賀郡生井村大字下生井

本籍 栃木県小山市大字下生井

現住所 右に同じ

生年月日 大正十三年五月六日

出身校 下生井村尋常高等小学校

入隊 昭和十八年五月一日 横須賀海兵隊入隊

転属 同年五月 九州築城海軍航空隊

昭和十九年三月 千葉航空隊 三日間

同年三月 館山航空隊

同年四月 北海道千歳航空隊

同年七月 北海道美幌航空隊

同年十月 北千島占守島五百五

十三航空隊

昭和二十年十月 ソ連軍指揮下に入る

ソ連ナホトカ港着

スーチャンにて伐採

労働

帰国 昭和二十二年五月 ナホトカ經由舞鶴

上陸、復員。

帰国後 現住所にて夫婦と長男夫婦、孫二人同

居とともに鮮魚商及び雜貨店を経営し

ていたが、目下息子夫婦に経営を任せ

ている。親切な良いおじいさんであ

る。子供三人、孫五人は別居である。

(栃木県 野沢 芳夫)

手記

千葉県 綾部 浩

私は、昭和十六（一九四一）年十二月一日に、東部第十七部隊（輜重隊）に入隊し、翌年二月にその部隊は出発、外地に向かった。私達はどこに行くのか一切知らされていなかったが、北支方面ではないかという噂はあった。着いた部隊は、北支那方面軍第三十二師団楓第四二六〇部隊の第二中隊第四内務班に配属された。

そのうちに部隊の一部は南方方面に移動を開始し、東部ニューギニア島に上陸したとの話が伝わって来た。

私は関東軍隷下の部隊編成のために、その要員として下士官十人が残されたその一人であった。そのとき、現地召集で約五十万人が集められ、国境のノモンハンに集結した。しかし敗戦時の昭和